

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずさうろうか。

詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなりと云々

第4組 瑞雲寺住職

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

## 第二章 愚身の信心

### 法に帰依する

八万四千とも言われる法門を釈尊は説き開いてくださったのですから、仏教は釈尊から始まるという了解は、常識と言えるのでしょうか。ところがこの一段は、前段の「地獄一定」という言葉から、やや唐突とも言えるような、「弥陀の本願まこと」という言葉に転回していることに注意せざるを得ないのです。三宝帰依は、一神教といわれる他の宗教に簡んで仏教の特徴と言われています。では一体何に帰依するのかと言えば、どこまでも真理の法、特にここでは南無阿弥陀仏という念仏の法に帰依するのであります。原始仏教においてはその法の権威が最高であり、目覚めて仏陀と尊称される仏宝の上に位していたとの指摘があります。親鸞も釈尊を仏陀たらしめているのは、その悟ったところの法であると感得されました。そのことを曾我量深師は、

釈尊という仏陀があったということは、釈尊をして直ちに仏陀如来たらしめている歴史的背景の問題であります。釈迦という単なる人格、そういう問題ではない。釈迦という人格をあらしめた仏道の問題。釈迦をして真実の釈尊たらしめ、釈迦をして本当の仏陀たらしめ、釈迦をして真実の如来たらしむるところ、そこに本当の仏法の歴史があり、弥陀弘誓の歴史というものがある。仏道の歴史の中に釈尊は誕生したもうた。

(『親鸞の仏教史観』九四頁)

と語られています。この徹頭徹尾弥陀の本願という「まこと」で貫かれているところに、教祖という一つの人格に帰依するものではないという宗祖の明白な姿勢が現れていると思います。

### 念仏の伝統

依るべき法、つまり真理が教えとなってこの身にいたり届いたとき、私が生きていける道は開けてきます。釈尊が教主と尊称される意は、仏法を仏教にまでして、人類の歩める道として、先立って開示して下さったところにあるのでしょ。そこに釈尊を生み出すような、衆生の志願ともいべきものを感じることでもあります。法の真理を真実として流転の衆生に手渡して下さった、「釈尊の説教というのは『大経』の願成就の文をさすといべきでありましょが、もっと直接なものは『観経』の下々品の教説をおさえて（『歎異抄聴記』一七一頁）いると教えられます。その『観経』は、「機の真実なるところをあらわせり」（『口伝紗』聖典六六八頁）といわれるように、韋提希に代表される「末世造悪の凡機に説ききかせ」（同右）るための經典であります。善導大師はその仏の正意を『観経疏』散善義深心釈において二種深信と訳されました。特に機の深信について、ここでは「地獄一定すみか」という宗祖の自覚を開いたのです。この点について、「ああ自分はダメな奴だとか、わるいことをしたとか、つまらない奴だ、もうダメなのだという心と、機の深信を一緒にして考えてしまいます。そうではなくてかえって自分をおとしめている心を離れるために、機の深信の釈を設けられた」（『蓬茨祖運選集』第十一卷五三頁）というご指摘のとおり、弥陀の本願によってはじめて私たちの自覚が生まれるのです。劣等感や自らを卑下する心は慢心の裏返しであり、むしろそこから解放するものこそ機の深信の意味なのです。

## 愚身なる私に

関東の門弟たちは、かつて「ただ念仏」の教えに頷いたはずなのに念仏以外の道に迷って、宗祖に答えを求めて上洛してきたのでありましょ。善鸞による異義、日蓮上人の言による混乱がその背景として指摘もされますが、身命をかえりみずして尋ねるべき根源的な問いとは、往生極楽の道ひとつであったのです。宗祖は同行に対して、命がけで尋ねてきた故にこそこのいたわりと、しかし法においては遠慮をなさらず厳粛な態度で、静かに自身の確信を語られたのであります。

愚身とは宗祖の自力無効の表明であります。この法、つまり弥陀の本願まことにおいてのみ、助からない身のままに自身の真の安住を得ることができたのです。その喜びに充ちた確信は、すなわち弥陀の本願成就の伝統に立つことの表明でもあるのでしょ。その「まこと」の伝統は、直接的には、よき人法然の仰せひとつを生涯蒙り続ける親鸞を生んだのであります。